歴史散歩

れきしさんぽ No.30

久留米市の河童2
草野風流と河童

草野町須佐能袁神社（祇園社）に草野風流の起源が伝えられている。建久2年（1191）、筑後川の河童の大将が、草野の殿様に助けを求めにきた。茶色い河童から殴り込みをかけられ、部下が殺され、明晩庄の前を攻撃するとの果たし状が来ているので、明日の昼までに巨瀬川にキュウリをメゴ10荷ばかり投げ込んでほしいとの頼みであった。河童は好物のキュウリを食うと、百人力、千人力の神通力を発揮するそうで、これを聞いた殿様は翌朝20荷のキュウリを巨瀬川に投げ込んだところ、その夕方から筑後川は濁って、高波が立ち、荒れ始めたが、晩になってぴたりとおさまった。水面下での河童戦争も終結したらしく、その夜、殿様のところに河童の大将が家来を連れてお礼に来た。そして、笛・鉦・太鼓で大合奏をして謝意を表した（橋本天呑稿「久留米・河童まん荼羅」）。なお類話として、建久5年（1194）5月、草野永平が家老甲木織部と下郎佐吾吉を連れて見回りした時のこと、投宿した石浦の村長宅に、夜半巨勢川下の三九瀬に根城をもつ権三河童という頭領が訪れて、訴えごとがあり、これを聞き入れた永平が茶色のペルシャ河童を懲らしめるという筋書きのものがある（純真女子短大国文科編『九州の河童』）。このことは、当社に残されている文政11年（1828）の文書に、「抑々も草野風流と申すは昔、草野の庄、九瀬川の河伯より不思議の教を請い、当社祇園牛頭天王奏し来り。（下略）」とあるのと符合する。『北筑雑藁』によると、九十瀬川の九十瀬入道と筑後川の尼御前社とは匹配（つれあい）であって、「時々此川に会ス。風雨暴発シ水面拾集スルハ乃チ其候ナリ」とあるのはそのことであろう。時折川が荒れるのは夫婦が出会いのときというのは容易に理解しがたいが、筑後川の河童と巨瀬川の河童は不仲だったのかもしれない。火野葦平は、「集団的には筑後川と巨瀬川との河童たちが勢力争いの結果、闘争を展開するときに、自己の縄張り内の水量を両方から増やしあって圧倒せんと企て、堤防から氾濫させて洪水をひきおこすことによって、沿岸の人々を困却させた。」と述べている（『河童物語』昭和３０年）。

筑後川の水神について、『寛文記』に記す尼御前大明神とは罔象女（ミズハノメ）神と考えられるので、筑後川の水神の頭目は女性であったはずである。北九州の海御前は源平合戦で戦死した平教経の妻と伝えられ、壇ノ浦に沈んだ平家の怨霊は、男たちは平家蟹に、女たちは河童になったという。ここでは海御前は河童の頭領なのである。九千坊の話といずれが先行するかは

草野風流

定めがたいが、古来祭られた水神は河童ではなく、罔象女神と推測すれば、もともと筑後川の水神は女神で、巨瀬川の河童を男神とみるのが穏当かもしれない。別に、罔象女神を河童そのものと見る説もある。この女神の像は界隈では庄前神社の祭神が知られているが、田主丸町馬場瀬大明神を拝観した矢野一貞が「庄前大明神の脇、水罔象女の神体とその形容相同じ。疑うらくは是河伯（河童）の像か」と述べている。

『日本書紀』仁徳天皇67年条に、「是歳、吉備中国の川嶋河の派に、大糺有りて人を苦びしむ」とある。ミツチとは水の精霊をいう。ミツハもみずの精霊で、寺島良安著『和漢三才図絵』（1712）に、「淮南子」を引用して、「三歳の小さき児の如く赤黒色、赤き目、長き耳、美しき髪」とある。ミズハノメはわが国固有の水神で、記紀によると、イザナミの尊の死後、そのユマリ（尿）から生まれたという。奈良県の丹生川上神社に平安初期作の木彫神像があるというが、筑後地方でミズハノメを拝観できるのは、庄前と馬場瀬ぐらいのものであろう。庄前の像は耳が長く、馬場瀬のものは宝冠を頂き、共に不思議な雰囲気を醸し出す女神像である。しかし、本来ミズハノメは請雨祈願の神であって、基本的には荒五郎とは異質の神である。

二類の河童神像

古記録の荒五郎像が現存する例と推察されるものに、筑後市大字井田の若宮神社の神像がある。『寛延記』下妻郡下牟田村の条に、「若宮神 荒五郎大明神 不動明王 右三体木神 壱処二御座候」とあり、寛保元年（1741）箱書きの不動明王と4体の河童木造が遺存している。しかし、記録として残された最古の河童像は、片淵神社の荒五郎大明神像であろう。『寛文記』に「吉田御書出之写」として、「筑後国山本郡蜷川村荒五郎大明神之祠官酒見宮内少輔正真　云々」のくだりがあり、寛永拾癸酉年（1633）九月四日の期日が記入されている。即ち、当所の荒五郎は記録の時点より40年ほど前からすでに祭祀されていたことになる。案外、室町期に溯る彫刻かもしれない。神像は高さ19センチほどの木彫で、右腕と両足首は欠失しているが、顔面はもとより後頭部や腰の着衣のひだまで細密に彫現されている。頭頂部に窪みを作り、いわゆる河童の特徴を表わしている。清盛像と伝えられる庄前神社の河童神像も同時代の作と推測できるが、『寛文記』には記録されていない。しかし、尼御前社の荒五郎大明神像がこの神社に合祀された可能性が高いのは既述の如くである。前記馬場瀬大明神については、『菊池家譜』によると、祭神は水罔女神で脇立３体とあり、寛永16年（1639）11月22日の日付があるが、河童像が2体あって、九千坊と沙悟浄に比定されている。前者は空手であるが、後者は左手に剣を支えている。志床の「川ん殿さん」も右手に武器を持つらしい跡が見える。三潴町大犬塚の高良玉垂命神社境内社にも剣把持の裸形神像がある。

これらの神像の作成年代はわからないが、大木町笹渕高良玉垂命神社境内に３体の神像を半肉彫に表現した一枚石の石像が祭祀されていて、享保8年（1723）の銘が刻まれているのが貴重である。裸形神を２体従える水神（水罔女神または乙姫）や若宮神を祭る祠は南筑後に幾例が見られる。1体は水神（河童）で、剣をもつ他の1体はおそらく火の神（火伏せの神）か火雷神であろう。

庄前神社罔象女神像

「安坊」は河童か火の神か

『寛文記』の尼御前大明神に供奉する安坊大明神については他の記録がないし、神像その形姿も容貌も不明である。庄前神社に祭祀される４体の神像の中に異形の１体がそれかもしれない。背丈は１８センチほどで、荒五郎よりひとまわり大きく、髪を逆立て怒りの表情である。

頬骨が出て顎がとがり、吊り目で眉間が狭く、唇は固く結んでいる。男女の別も定かでないが、平家伝承ではこれを二位尼の怒りの姿と見立てたのだろうか。平家の怨霊が河童になったとすれば、荒五郎も安坊も河童の別呼称である。荒五郎（荒御霊）は荒御魂で男の河童、安坊（尼法師の転か）は和御魂で女の河童と割り切るわけにもいかないようである。九千坊・不禅坊など「坊」は河童名の接尾語のように使われるので、水の精霊と見るのが筋であろう。あるいは海神の安雲磯良から創出したアントン坊の約かもしれない。安坊はまた安坊とも記し、『寛文記』と『寛延記』に数例を見る。

庄前神社安坊像

音読みなら、安坊（安房）はアンボウ、アボウであろうが、湯桶読みの荒五郎に合わせればヤスボウとも読める。現に、筑後市など筑後南部でヤスボウを祭る社祠が数例あり、柳川市大和町鷹尾では火の神として信仰を集めている。ここには男女２神像を祀り、裸形の男神像がいわゆる河童である。みやま市瀬高町上庄に火伏せの神として著名な屋須多神社が鎮座している。語音が似ているので、この神と習合したのかもしれない。筑後市中牟田の民家に屋須多神像を祀る所があり、祠内の神像は火焔を背負った不動明王そっくりの憤怒相をしている。

筑後地方の水神信仰は、3神像構成か2神構成のものが多い。3神の場合、男神を主神として左右に男女2神を配する「若宮3神」か、女神を主神として左右に男神を配する「罔象女3神」かである。前者の主神は若宮で左右は乙姫と河童である。後者の主神は乙姫（ミズハノメ）で左右は2人の河童である。河童は空手の裸形像と剣・鉾・鈷杵などをもつ裸形像の２人が乙姫に供奉する。別に２神構成のものがあり、乙姫と河童を祀っている。

上半身裸形の２体の神像といえば、寺院の山門に立ちはだかる金剛力士や雷神・風神を想起するが持ち物が河童とは異なる。河童は水神、竜神であって、それにかかわる神は竜王である。八大竜王（竜神）の中に難陀・跋難陀・沙羯羅竜王がある。観音28部衆の中に難陀竜王と沙羯羅竜王がある。右手に太刀、左手に羂索を持つの難陀竜王で、「その時に応じて雨を降らし五穀成就し歓喜ならしむ」といわれている。沙羯羅竜王は頭髪を逆立てた勇猛の相という。庄前神社や馬場瀬神社の河童像は３人の竜王のいずれかが下絵にあるのかもしれない。

若宮信仰と河童

南筑後一帯に「若宮さん」（若宮神社）と称する小社祀が幾許かある。これを「若宮八幡宮」と混交して、祭神を仁徳天皇（応神天皇の皇子、すなわち若宮だから）とする向きがあるが、両者は明らかに別個の信仰に基づいている。東京堂出版の『民俗学辞典』によれば、若宮とは「大きな神格の支配下に置かれる前提の下に、はげしく祟る霊魂を神として斉いこめたもの。（略）概して非業の死を遂げた者が祟りをなすのを怖れて、坐女神職のすすめにしたがい、神として祀るに至ったという由来のが最も多く 云々」とある。大きな神格には宇佐八幡や石清水八幡があり、熊野や春日などがあり、地元では高良の神が想定される。

「若宮」の語の初見は、8世紀初頭に編集された『肥前国風土記』で三根の郡、物部の郷（現、みやき町中津隈字板部か）の条に、推古天皇の命を受けた来目皇子が物部若宮部を遣わして。「その神を鎮ひ祭らしめたまひき」とある。その神とは「物部の経津主の神（布都御魂と同系）のことで、神武天皇がタケミカヅチノ神から賜った剣の名という。高良山の祭神は物部氏の氏神であり、布都の神剣が奉祀され、また７世紀半の『詫宣記』や『筑後国神名帳』斉衡三年（856）

文書に物部の記名があることを勘案すると、古代・中世における筑後地方の若宮信仰は物部若宮部の存在と関係が深かろう。

近世の若宮信仰には河童が絡んでくるように思われる。おそらく松童（まつわらわ）や少子部（ちいさこべ）などの影響が考えられ、小さいという概念から派生したのであろう。『日本霊異記』には少子部栖軽が少子部雷と改名した話などがあって、ここでは雷神へのかかわりも出てくる。蛇や竜は水神であるが、雷となって雨をつかさどる。雷は降雨の権化であり、イナズマ・イナビカリの語が示すように、稲作とかかわってくるので、水神と火雷神は農業の神様でもある。

かつて「若」は幼児の名前の下につけた。「今若・乙若・牛若」で知られるように中世の名付けの慣習であったろう。「若宮」をにおわす神号で「‥若」をつけるものに、田主丸町志床の申若大明神と大橋町合楽の瘤若神社がある。前者は『寛文記』（1670）・『寛延記』（1749）・『筑後志』（1780）に記されているので、かなり著名な河童なのであろう。藤田正登氏によると、日田の古文書『豊西記』に鶴熊丸の事績として、「応安七年（1374）菊池追討の時、今川了俊御方にて出陣これあり。違例により、帰国の時筑後国馬渡にて逝去、行年十四歳なり。しかる後、鶴熊丸の荒霊、河伯水神の吏となり筑後国ならびに日田郡に至り、万民六畜を悩乱せしむ。彼の荒霊を和らげんために社壇を営建し、明神とあがめ奉る。」とあるという（『九州河童紀行』）。まさしく若宮そのものであって、祟りの神と化した荒御霊であることが示されている。なお、「申」は猿に通じ、河童を意味することがある。猿と河童は仇敵であるが、河童をエンコまたはエンコーとよぶ地方も少なくなく、「猿喉」の文字を充てるので、猿は水底に潜って河童になると信じられたのかもしれない。石田英一朗は、「九州にも、河童に出あったところ、その形も大きさも、泣く声までも猿ににていたと報告する者が多い。また今ならば当然河童とよぶべき水底の怪物を、中古河猿または淵猿と名づけた例も諸書にみえている。」と述べている（『新版 河童駒引考』）。「申若」はすでに河童を意図してつけられた名ではなかろうか。因みに、みやま市瀬高町東八丈の天道神社（古名、若大明神宝殿）は宝珠を捧げる女神像を祀るが、その頭部前面に猿の顔を刻み、台座に「寶珠 申」の墨書がある。脇侍として赤く塗られた河童がいる。大橋町合楽差出の瘤若神社は天満宮と合祀るされているが、『寛文記』に卒都婆野大神大明神、『寛延記』に卒都婆大明神と記されている神と関係があろう。牛馬守護神という点が庄前神社や蜷川の荒五郎大明神に通じており、さらに関連を調査する必要がある。

（文中敬称略）平成20年8月21日 坂田 健一

※文章背景写真　P2：庄前神社荒五郎像　P3：田主丸雲雀川周辺の河童像　P4：ＪＲ田主丸駅

久留米市指定有形民俗文化財
素盞嗚神社の木造河童像

久留米市指定有形民俗文化財
宮地嶽神社の石造河童像

久留米市指定有形民俗文化財
熊野神社の木造河童像

歴 史 散 歩No.29　　発 行：久留米市文化観光部　文化財保護課　〒８３０－８５２０　久留米市城南町１５－３
TEL 0942(30)9225　　発行日：平成21年　月　日